

「無理は重々承知している。頼むよ君イ」

何を懇願されているかという五十日後に迫った国語科研究会で中心授業者になってくれ、ということだ。

当初その役にあったA先生が病にたおれ、急遽代打として白羽の矢がたったというか、お鉢が回ってきちゃったというか、いずれにせよえらい災難・大迷惑である。第一そんな実力はない。まだペエ なのだ。

すでに当校としては案内状を関係先や市内及び周辺の小学校に配布済みであり、当日は参観者がワンサカ訪れるのは間違いない。いずれも国語科の主任とか指導員の立場にある方々で、それぞれ一言をもっている先生達でしめられる。

大勢のプロの目に晒されるのだ。誰だって腰が引ける。また学校の名誉がかかっているから授業者は半年も前から心構えしておくのが常だ。即ち満を持してその時を待つ。担任している子供らもそれなりに〈耕して〉おかねばならぬ。そんなこんなで辞退するつもりが――首を縦にふってしまった。

自信など塵程もなかったのに。ただ心のどこかに『向かい風』に挑むチャンスだ、という身の程知らずの無鉄砲なノー天気さだけがあった。時に小生三十四歳。

今回の国語科研究会のテーマは“漢字の誤用に気づかせる”ということで、そのためにはどのような指導をしたらよいか、が目的といえる。

小生と共に組上における児童は五年三組四十二名。持久走大会ではダントツの強さを誇る学級だが……。

研究テーマから察すると同音や同訓の語を切り口として扱おうと思った。最大の悩みは導入部に何をもってくるか、それをどう展開していくか、である。余裕はない。焦ってきた。

ある日曜日、寝そべってラジオから流れる児童合唱団の歌声を聴いていた。懐かしい童謡の数々。さいごは『赤とんぼ』で終わった。

その瞬間、天啓?があった。(これだ!!) 勢いよくとびおきると想に詰まっていた授業案を一気に書きあげた。かすかな希望と意欲が沸沸と湧いてくるのを感じた。

さて当日。わが五年三組の教室は溢れんばかりの参加者で超満員。晴れの舞台となるか赤っ恥の場と化すか、内心の葛藤を抑えてさあらぬ態を装っているのだが……。

始業のチャイムで（さ、いくぞ）と気構えをし、子供らのこわばった表情をほぐすため『赤とんぼ』を斉唱させたのち、大きくその歌詞を全部ひらがなで板書した。

ゆうやけこやけの あかとんぼ

おわれてみたのは いつのひか

そして努めて簡潔に指示した。

「漢字にできるところは漢字に直しなさい」

子供の反応は速い。「簡単簡単」なんて言っている。こっちはその油断が狙いめなのだ。

結局左のように書き直された。

夕焼け小焼けの 赤とんぼ

追われて見たのは いつの日か

しめた！ こうこなくちやあ先に進めない。予想は見事に的中したのである。

もし最初から〈おわれて〉を〈負われて〉と正しく書かれたらその時点で授業展開は大きく狂う。自分の力では収拾できなくなる。この誤用に賭けていたのだ。うまく嵌って実にホッとした。

「追われるって誰が何に追われるんだ？」

この発問に子供らはン？ アレレ？ と頭を傾げると、意見と異見がとびかった。

こんな場面を想定して一ヶ月も前から従来の一問一答式のやりとりを極力廃し、子供の間で練りあげられたものが教師に返ってくるよう力を注いできた。即ち〈ピンポン型〉から〈バレーボール型〉の意見の応酬ができるよう訓練を重ねてきたのが奏功した。

このかん がく の意見交換を微笑で参会者が見守っている。この場面、詳述したいが自慢話になりそうなので割愛。

子供らに〈追われて〉は字が違うんじゃないか、と気づかせるのに数分、国語辞典で調べれば……と導くのに三分かかった。辞典はちゃっかり用意して二十冊教卓の隅に積上げてある。結局〈負う〉をみつけて解決した。

〈追う〉〈負う〉のような言葉を同訓の語というのだと教えたあと、日本語にはこれが無数にあり日本語の特徴、特長である上に奥行きを深さを感じさせている、これからも使い分けに注意しようと言いた。

ついでに英語の場合はrightとknightくらいしかない、とやらんでもいい学々をひけらかし、あとで反省した。

授業直後、ある男の子が「父ちゃんに試してみよっと」と呟いて参会者の笑いを誘った。総じて上手くもないが下手でもない授業ができたかな、と甘い自己評価をしていたが……。

反省会の席で嬉しかったのは講師の先生から褒められたことだ。特に『赤とんぼ』の歌詞を切口として導入部に使った閃き？とアイデアを高く買ってくれた。

今でも思い出すと『赤とんぼ』の作詞者三木露風に満腔の敬意と謝意を表してやまないものがある。『赤とんぼ』に気づかなかったら一体何を教材にもってきただろう。

——後日談がある。

「父ちゃんを試す」といつていた浩司くんがこんな報告をした。

「父ちゃんはやっぱ〈追われて〉って書いたよ。でボクが『こうだ』って教えたら『このヤロー』って嬉しそうに笑ってた」。

志乃ちゃんはノートをみせて言う。

「先生、〈コウカン〉って同音異義語を調べたら十一個もありました」。

この会話を聞いていた千秋くんが翌日得意げにみせたノート。羅列する漢字群。

〈後記・後期・香気・校旗……〉

「な・な・なんと十五もあったよ先生」と目を丸くして報せた。

かなり前のことだが雑誌に阿川弘之さんが随筆をよせていた。文学賞の予選通過した候補作の中に同音異義語のまちがいがあることに憤り、そして嘆いておられたと記憶する。

たしか避難を非難、士官学校を仕官学校との記述があったからだ。「陸軍仕官学校」なんて書かれたら我々昭和ひと桁以前に生まれた方なら誰でも怒りたくなる。

これを読んで他人事ではないと大いに反省したものだ。自分もけっこう誤字や誤記を平気でやっているかもしれない。この拙文だって数多く指摘されるだろうと思う。

「同音異義語」といえば――。

小生八十過ぎて前立腺ガンを患い、すでに五年余ガンセンターに通院している身。

ヨメイについて考えるときがある。いや残りの命のことではない。「余命」ではなく「与命」である。与えられた命を有為に生きて人生を全うしたい。格好つけていえば命の質を高めていきたい。

「与命」。勿論自分だけに通用する造語だが、なかなかいい同音異義語だとひとり悦に入っている。